

# あつろの杜

北海道出版企画センター代表取締役

野澤緯三男さん

Interview

今回お話ししてくれるのは北海道出版企画センターの野澤緯三男さん。松浦武四郎の翻刻本や単行本、松浦武四郎研究会の会誌など、出版界で長い間武四郎と関わってきました。

## 前身は明治三十一年創業の野澤活版所

北海道出版企画センターは、父が昭和四十六年に始めた会社です。元々うちは明治時代から札幌にあった野澤活版所という印刷会社だったのですが、父には出版をやりたいという志がありました。東京の出版社に勤めていましたが、昭和十六年に帰省した際、北大の河野広道先生に原稿依頼をしました。その後、戦争疎開のため退職して札幌に戻って来ましたが、先生に書いていただいた原稿は戦時中だったのでなかなか出版できず、お断りの手紙を書くはめになった。そんな経緯があったので、父は出版のスタートに先生の著作集を出したいと思っていました。

設立したとき既に先生が亡くなって八年ほどたっていました。出版の許可をご遺族の河野本道先生にお願いしたところ、広道先生の友人であった高倉新一郎先生に編集委員会の代表になっていただ

## 武四郎の思いを 活字で残し 人物を伝える



北海道の出版活動を集成した『北海道の出版文化史』



野澤緯三男  
のざわ いみお

東京で家電関係の会社に勤めていたが、1975年に父に手伝わないかと言われ、Uターンし創業間もない北海道出版企画センターへ。以来、北海道に関する歴史・アイヌ・人物・自然等の書籍を出版している。松浦武四郎関係の出版も多く、センター内に松浦武四郎研究会があり会誌の発行を行う。1991年地方出版文化功労賞次席受賞、翌年地方出版文化功労賞を受賞。2006年には粹出版文化賞を受賞している。

こうということでも話がまとまり、著作集『北方文化論』四巻を刊行することができました。うちの出版物の骨子が歴史関係のものになっているのは、出発が河野広道先生の本だったからだと思います。

**武四郎本は昭和五十三年から**

松浦武四郎の出版物関係ですが、最初にいただいた原稿が高倉先生

からで、安政三年の『竹四郎廻浦日記』でした。これが出発点で、昭和五十三年の出版です。

仕上げの段階で、入力を担当した印刷所の人が「涙の最終稿」と打ってきた。それほど大変だったんでしょう。解読してあるといっても、文章も文字も難しく、読んでも判断が出来かねる。本当に一生懸命やってくれたんだと思う。それで涙の最終稿ですよ。僕はこれが未だに忘れられません。

高倉先生のととは秋葉貴さんですね。秋葉さんには安政四年の『丁巳日誌』、安政五年の『戊午日誌』の出版を許していただいた。そのあとも次々と出せたのは、「秋葉さ

んがやるのであれば」と、武四郎の子孫で史料所蔵者の松浦一雄さんのご理解があったからなんです。

### 武四郎の魅力

アイヌの人たちに対する武四郎の接し方には、当時蝦夷地を調査した人たちとは雲泥の差があります。『東西蝦夷山川地理取調図』という一番大きな地図がありますが、その最初の巻に二八三名のアイヌの人たちの名前を載せています。きちっと地域を分けて、この地域はこの人たちの案内です、という形で残しているんですよ。「この人たちがいなければ地図はできませんでした」と言いたかったと思います。樺太の地図にも案内してくれた五二名の人が載っています。

幕末にこのような人物は他にいません。武四郎の場合は案内したアイヌの人びとと寝食を共にして調査していますのでね。蝦夷地を探索した他の人たちと武四郎との違いはそこにあります。

### 叶わなかった思い

武四郎には場所請負制を廃止し、アイヌの人たちを救済してほしいという思いがあったんですね。一度開拓使から廃止のお達しが出されます。

しかし、松前藩は無くなったは

ずなのに新たに設けられた開拓使という役所が、薩摩を中心とする役人と、それを取りまく商人たちに不当に運営され、廃止されたはずの場所請負制は漁場持という形で復活します。

武四郎は怒りを新たにし、明治三年三月に辞表を出して開拓判官を辞めます。表向きの理由は病気のためとなっていますが、それは辞職願いというより施政を弾劾する長文のものです。

武四郎は十三年前の安政五年十一月に蝦夷地を去って以後、一度も北海道に来ることはありませんでした。

### 感謝

高倉先生や秋葉さんの出版が無ければ、まだまだ武四郎のことは知られていなかったでしょう。

秋葉さんや高倉先生がやった史料の翻刻や野帳を活字にする仕事は本当に目立たない仕事です。論文を書いたほうがよほど評価されるのに、秋葉さんなどはその仕事を何十年にもわたって行なってくれました。あとは印刷所・製本所さんの協力。決してうちがあつてのことではありません。うちが原稿をもらって世に出すことができているのはそういう方々のおかげだと、感謝しています。